

がん登録と医学教育

安田 誠史*

がん登録はがん医療とがん対策に係わる医学教育に貢献している。しかし、医学教育のがん登録に対する貢献は乏しく、医療人のがん登録に係わる基本的知識を教授するにとどまっている。がん登録が事業として拡充されるこれからの医学教育には、がん登録実務者の育成だけでなく、がん登録実務者に協働する医療人、およびがん登録研究者の育成にも貢献する視点を持つよう求めたい。

1. はじめに

がん登録は、がんの罹患状況とがん患者の生存状況に係わる記述疫学資料を整備し、また、がんの危険因子を解明する分析疫学研究でのがん罹患把握、あるいはがん検診の精度管理に係わる分析疫学研究での見逃し例の把握を可能にする。従って、がん医療とがん対策に係わる医学教育でエビデンスとして引用される材料を提供する仕組みである。しかし、医学教育に携わる者は、がん登録に携わる者の育成に貢献することにあまり関心を払ってこなかった。がん登録の仕組みの構築と登録資料の利用は、研究活動と位置づけられ、がん登録に携わる者の育成は、がん登録に先進的に取り組んでいる施設での研究者による指導に委ねられてきたからである。これからは地域がん登録がすべての都道府県で実施され、がん登録は、がん罹患とがん医療の実態を把握

し、がん対策の企画と評価の拠り所となる事業としての要素を強める。医学教育は、事業としてのがん登録を担う医療人、そしてがん登録資料から学術的成果を引き出す研究者の育成に貢献する視点を持つ必要がある。

現在の医学教育関係者ががん登録に対してどのような位置づけを与えているのかを踏まえて、医学教育のがん登録への貢献を拡充するために、がん登録関係者から医学教育関係者に対して求めたい視点を提案した。

2. がん登録に係わる医学教育の現状 —がん登録に係わる基本的事項の教育

医療人のがん登録への理解を深めるためには、がん登録が医療人の卒前教育の項目として位置づけられていなければならない。現在、医師あるいはコメディカルスタッフを育成する教育で使われている標準的な社会医学分野の教科書^{1,3)}では、保健統計または生活習慣病対策の章で、がん登録について、意義および仕組み^{1,3)}、あるいは具体的成果^{2,3)}が解説されている。従って、医学教育に携わる者は、がん登録に係わる基本的事項を教授することを、医療人の卒前教育の項目として位置づけていると考えられる。

*高知大学教育研究部医療学系（公衆衛生学）
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

3. がん登録に対しこれからの医学教育が持つべき視点

現在の医学教育は、がん登録に係わる基本的事項の教授を、医療人の卒前教育の項目として位置づけているので、がん登録に関する基本的知識を持ったうえでがん登録の実務者となる医療人を増やすことに貢献するはずである。これからのがん登録に係わる医学教育には、がん登録の即時性と完全性の達成に貢献する、がん登録の実務者と協働する医療人を育成すること、および、がん登録資料の学術的活用に貢献する、がん登録の研究に携わる医療人を育成すること、これら2つの視点を持つように求めたい。

(1) 実務者と協働する医療人を育成する視点

がん診療の拠点となる医療機関では、院内がん登録が設置され、診療情報管理部門に配属されるがん登録実務者が、診療録から必要な情報を収集する方式でがん登録が運営される。この方式で行なわれるがん登録での即時性と完全性を達成するためには、がん登録実務者と協働する医師を育成するという視点を持って医学教育を進める必要がある。実務者ががん登録を行なう際に必要な情報を収集しやすい診療録を作成し、退院時要約を、他の職種が理解できる用語を使って適正な期間内に作成できる医師を育成する視点が大切になる。社会医学分野の授業科目だけでこの視点からの教育を行なうことは不可能であり、診療情報管理分野の授業科目で、がん登録における診療録の意義が教授されるように働きかける必要がある。

なお、拠点病院以外では、がん診療に携わる医師自身ががん登録票を作成する方式が続くと考えられる。がん登録の仕組みの基本はがん患者を診療した医師自身による登録であることを明確にしておくことは、

これからの医学教育でも重要である。

(2) 研究者育成につなげる視点

がん登録実務者の育成、および実務者と協働する医療人の育成は、がん登録の精度向上と、登録情報の質の向上につながると期待される。しかし、登録資料の解析、解析結果のがん対策への活用の段階では、がん登録の研究者の参画が必要になる。医学教育関係者には、そのような研究を行う医療人の増加に貢献するという視点も求められる。

大学医学部附属病院は、がん診療連携拠点病院として院内がん登録を行なっているため、学生が、登録実務と登録資料の活用の実際に参加できる実習を企画することが可能だと思われる。報告者が所属する高知大学医学部では、臨床実習のコア期間を終えた後に選択実習という期間が設けられており、学生は、興味を持つ特定の診療科・部門で数週間、参加型実習に臨む。このような選択実習の期間を持つ大学医学部は、がん登録の指導医がいれば、院内がん登録室での実習学生受け入れを実現しやすいと思われる。登録実務と登録資料の解析に参加する実習の実施が、将来、がん登録に係わる研究活動に参画する人材の発掘につながると期待される。

4. 結語

がん登録に携わる者が、医学教育に携わる者に、がん登録に係わる基本的事項の教育だけでなく、がん登録の実務と研究に参画する人材の育成にも貢献するという視点を持つよう求めることは、がん登録を量的にも質的にも深化させることに不可欠と考えられる。

参考文献

1. 鈴木庄亮, 久道茂, 監修. 辻一郎, 小山洋, 編集. シンプル衛生公衆衛生学

2012. 東京：南江堂，2012.
2. 岸玲子，古野純典，大前和幸，小泉昭夫，編集. NEW 予防医学・公衆衛生学(改訂第3版). 東京：南江堂，2012.
 3. 岡崎勲，豊嶋英明，小林兼毅，編集. 標準公衆衛生・社会医学(第2版). 東京：医学書院，2009.